

歌に記録されるコロナ

— 歌集から見るコロナ禍 —

新型コロナウイルスの感染症が流行し始めてから三年。コロナ禍と呼ばれる社会状況の中、私たちの生活は大きく変わった。これを書いている現在は第八波に入り、警戒が強まるもののインバウンド観光の再開とともに延期や中止されていた行事の「三年ぶり」開催が続いている。初期の感染拡大と未知のウイルスに対するパニックめいた状況は、ワクチン接種や対応法を学ぶことで徐々に落ち着きを見せ、局面がウィズコロナへ替わりつつあることを感じさせる。とは言え先行きは見えず、コロナ前と同じ生活には戻れないだろう。

何もかもが高速で忘れ去られていく現代社会。マスク不足で奔走した日々や東京オリンピックの一年延期、「人流」という不可解な言葉が飛び交ったこと等々はいつの間にか記憶の片隅に追いやられている。刻々と更新される情報に翻弄される生活。けれどこの混沌の渦中にも多くの歌が生まれ、コロナ禍の日々や折々の心が記録され続けている。

昨年来、この三年のコロナ禍下の作品を含む歌集が次々と発行されている。混沌の日々はどう切り取られ、どのように詠まれたのか。どう記録され、今をどう照らしているか。歌集の作品から考えて見たいと思う。

鈴木千登世

● 短歌の記録性 『象の目』 奥村晃作

一冊目に取り上げるのは『象の目』。あとがきに「おのずからコロナ禍歌集となった。」という言葉が載る。二〇二〇年三月の大相撲春場所の無観客から始まる新型コロナウイルスの作品は短歌教室の中止、マスク、手洗いの生活、Zoom 歌会など時系列に従って一歌人の体験したコロナ禍下の生活がつぶさに記される。「ただごと歌」と評せられる奥村の作品に比喩の歌はほほなく、読んでいると短歌という詩型が他のジャンルに比べて記録性に優れるという特徴を強く感じる。

街中で電車の中で囲碁会を見た人みんなマスク付けてた

マスクして鼻出す鼻のどの鼻もミニクイ鼻は出さぬが宜し

或る雑誌のインタビューに奥村は「ただごと歌」とは日常での感動や発見を「目で見たり肌で触れたりしたこと、自らの感覚器官で捉えたもの。それを忠実に描写する。写実です。」と答えている。一首目はマスク着用が進んできた当時の状況。現在はマスクを付けることが日常となっているが当時感じた違和の強さがリアルに記録されている。たたみかけ

る「で」の生むリズムに切迫した緊張が伝わる。

二首目もリフレインされた四つの「鼻」がリズムと韻きき作っている。また口語の親しみやすさを文語の緊張感で引き締める文体が独特の臨場感や説得力を生んでいる。

貸し室のシールド見事な出来なるもマスク
したまま歌評を尽くす

「間隔空けて坐り受講す」と題された横浜短歌教室での一連六首の中の一首。二〇二一年のコスモス二月号に掲載の、原作と考えられる五首に引用歌は見当たらない。代わりに歌集に未収録の「われのみはマスク外して話し継ぐ簡易シールドの備えがあれば」が載る。間隔を空けた座席、換気消毒などの対策に加えてのシールド。備えは万全なのにさらにマスクを重ねずにはいられない過剰で不条理な不安に襲われている人々の心理が詠まれる。歌集ではそんな人々の心理がより明確に切り取られている。

千円を入れると釣りがレシートが出て支払
いは機器が受け持つ

ヒトは皆顔にマスクを付けてると生後二歳
の子が認識す

四首目は「ヒトわれら到底出来ぬ変革を」の一連から引いた。レジでの支払いが超客観の目で描写されている。感染防止に人と直接接する機会を制限する動きが活発になり、それを機にキャッシュレス化を含めデジタル化が加速した。「距離」を余儀なくされる現状は、社会的存在である人間にとつて異常な事態。五首目のコロナ禍に生まれた子どもたちの認

識が未来にもたらす影響を思うと、未恐ろしい。作者の目に捉えられた今がアフターコロナの世界を暗示している。

●比喩から受け取るもの 『雪麻呂』 小島ゆかり

二冊目の『雪麻呂』からは比喩の用いられた作品を中心に引用した。小島の作品の特徴のひとつに比喩表現の豊かさが見られる。

三月のぼたん雪ふり首都圏は病む白鳥のご
とくひそけし

情報の言葉は車窓風景に似て過ぎゆけり東
京アラートも

パンデミックのひびき弾めりはじめから人
を踊らす言葉のごとく

いずれにも高度な比喩がさりげなく使われている。そして禍中にありながら全体を俯瞰するような目差しが心に残る。

作品を読みながら比喩によってその場の空気感までもが「掬い取」られ伝わるということを思った。言葉に言い表しがたい気分（＝空気感）が映像として差し出され、読者はその映像を思い起こすことで漂う気分を感受する。例えば一首目は「(首都圏の) ひそけさ」という目に見えないものが視覚的イメージに変換されている。「病む白鳥」に喩えられているのは、人々の姿が街から消えたコロナ禍下の首都圏の様子。雪の降る静けさと名状しがたい不安が、目を閉じ踞る白鳥に重なる。単なる比喩としてだけでなくウイルスに侵された首都圏の象徴として「病む白鳥」の姿は印象深い。

二首目は、言葉の過ぎゆく様子が「車窓風景」としてイメ

ーじされる。コロナ禍下では次々と新語を耳にした。「アラート（警報）」と耳に響くものの自分とは関わり淡いようでも聞き流してしまう様が、ガラスで隔たる車窓風景が流れ去る様として表現されている。

三首目は音感に触発された比喩。破裂音や促音の「弾むひびき」が「踊らす言葉」の連想に繋がっている。音から言葉という抽象への比喩なのに「踊る」に誘われ、読み手にはパンドミックの言葉に緊迫する人々の姿が見えてくる。

消え失せし白マスクそこに咲ひらきをり駅の広場の大きな木蓮

もう一首比喩の歌。緊急事態宣言が発出された令和二年の春は全国でマスク不足が起こり、日本中がパニックになっていた。マスク不足の時事が、白木蓮の花にマスクを投影した比喩によって美しい詩として浮かび上がってくる。

老人を子どもを守らねばならぬ介護者保護者守られたきを

比喩以外から一首。老人や子どもなど社会的弱者を守るこゝとが最重要なのは間違いない。では守る者側は。感染の脅威は誰もが等しいはずなのに、守りたいと口にするのは憚られる。対策に心を砕きながら介護者や保護者が心の内にこぼす小さなつぶやき、疲れ。声なき声が胸に訴えかけてくる。

●言葉の力と生の孤独 『水の自画像』高野公彦

三冊目の『水の自画像』では、「海を渡る蝶」の一連からコロナ感染の歌が始まる。

列島にウィルス感染拡がればわが身さへこ

そ日々揺るがるれ

一首目は『梁塵秘抄』の「遊びをせんとや生まれけむわが身さへこそゆるがるれ」を踏まえた本歌取り的な作品。愛唱性に優れる本歌の調べも取り込んで、新型コロナウィルスが大陸から日本に及んだ直後の動揺が詠われる。「海を渡る蝶」の一連には他にも近代詩や俳句の一部を取り込んだ作があり、一首の世界が重層的な厚みを持って広がっている。

疫えび病あり荒ぶる神の須佐之男よ巨おきそき息嘯も
て国くに浄めせよ

記紀神話の神「須佐之男」は疫病を祓う神としても各地の神社に祀られている。荒ぶる神としての力、疫病除けの呪いの「蘇民将来」との関わりなど一首の背後には圧縮された「物語」がある。須佐之男の力でコロナ疫を祓うことを言挙こと挙するような詠み方は、言葉には霊力が宿るとして国家の安寧を祈るものであった古代の和歌が髣髴する。霊力としての和歌を思い起こさせるような作品であると思う。

言葉を知り、言葉の力と呼び起こす。慈しむように言葉を
用いる作者ならではの詠み方が窺える。

にんげんの内部に棲みてしんしんと交差点
ゆくコロナウィルス

主語はウィルス。最初は宿主の「にんげん」に二重写しでコロナウィルスが見えるが、徐々に人間はフェードアウトしてウィルスだけに焦点が当たる。交差点をゆくのは人と言う思い込みが揺さぶられ、ウィルスに侵されている都市の姿が見える。「しんしん」が深く静かに進行する事態を感覚的に

表し、不気味さや不安が掻き立てられる。

フラスコの中にて生きてゐるやうなコロナ禍の日々、三食独り

コロナ禍の或る日おもへりにんげんは話し
相手が無ければ 海鼠

緊急事態宣言が発令され、三密の回避など「新しい生活様式」が呼び掛けられたコロナ禍下の日本。歌集の後半では長引く自粛生活の中で孤を深める歌が多くなる。閉塞感のある日常を透明なフラスコに喩える四首目。本来集団で生きるヒトが個として隔絶される孤独を、海中に沈む海鼠に喩え映像化した五首目。私の孤独を通して「にんげん」の普遍的な孤独へ作者の思いは及んでゆく。

●それぞれのコロナ 各歌集から

他の危機と異なり新型コロナの脅威は全ての人に分け隔て無い。さまざまな角度から、また作者それぞれの立ち位置から見た作品を挙げたい。

新型のコロナウイルス恐くなし冬の畑に働くわれは 喜多功『雉子は走れり』

濃き縁に繋がる老いら覚悟もて斎場に集う

コロナ禍の中 浅田みどり『こころ花めく』

芝ざくら群れ咲く春をひとびとは寄り添うために離れて座る 大西淳子『火の記憶』

三人がリモートワークする声を聞きつつ昼の Pasta を茹でる 松尾祥子『楳田軌道』

こゑを聞くもうそれだけで十分なはずなの

に会へぬ分だけ長電話す 鈴木竹志『聴雨』

咳しつづ（ぜん息です）のバツジより小さ

くちぢむ乗客ひとり

河合育子『春の質量』

喜多は三重県在住。人口密集のない地方には都市とはまた違う人との繋がりや因習がある。都市と地方の意識差が簡潔な表現で描写された作品は、二〇二〇年冬の第三波の流行の頃の作と思われる。二首目の浅田の作品には罹患のリスクを知りつつも最後の別れに集う古い人の心が捉えられている。

「覚悟もて」の重い響きにコロナの現実が見える。大西の作品には「寄り添うために離れ」ざるを得ないというアンビバレントな心情が滲む。傍らに座り美しい春を満喫できる日が待ち遠しい。松尾の作品はリモートワークが日常に溶け込んでいる場面が巧みに切り取られている。鈴木作品はコロナ禍でなければ相聞のようにも読める。「はずなのに」に抑えきれない切ない思いが覗く。河合の作品には不安や恐怖が不寛容を生む社会の姿が映し出されている。自粛警察やマスク警察という造語も生まれた。都市で、地方で、様々な世代によって日々生まれる歌は、コロナ禍という危機の全体像を浮かび上がらせる貴重な資料と言える。

* * *

切り取る奥村作品、掬い取る小島作品、孤を見つめる高野作品、様々な角度からの歌集作品。読みながら歌集に纏められた短歌の記録性を思った。未来から見るとコロナ禍の今は歴史の転換点にあるだろう。纏められた歌はその混沌にある生の記録として資料として貴重なものとなるだろう。